第４回　丹波市図書館基本計画策定委員会　会議録（要旨）

◇日時：令和７年 10 月９日（木）
◇開会：午後１時 30 分
◇閉会：午後４時 30 分
◇会場：丹波市立中央図書館　視聴覚室
◇出席者：(委員長)　嶋田 学
　　(副委員長)　蔦木 伸一郎
　　(委員)　中澤 利恵　由良 ゆかり　畑田 久祐　中岡 惠美
　　増田 博　井上 直志　足立 真美
◇事務局：(教育部社会教育・文化財課　図書館係)　高見 弘子　嶋﨑 美紀　塚田 千晴
◇欠席者：(委員)　橋本 千英　伏田 雅子　上山 未登利

１．開会

２．報告事項
以下の事項は、委員長の進行による。
（１）　こどもの読書にかかる調査について
①こども読書アンケート調査の結果について　資料１
②こども読書についてのヒアリング結果について
（R8 こども司書養成講座・受講性を追加）　資料２
説明：図書館係 高見係長（以下、係長)、嶋﨑主幹

係長
本日ご欠席の委員から事前に預かった感想を共有する。
・アンケートについて、問５「なぜ本を読みますか？」に、「楽しいから、おもしろいから」という回答が多かったことが嬉しかった。
・問７「本をいつ読みますか？」に、小中学生ともに「平日も休日も読む」という回答が多いことから、家で本を読む習慣がついていることがわかった。
・問８「本を読まないのはなぜですか？」に対しては、「読みたい本がない」「どの本を読めばいいのかわからない」との回答が一定数いるので、こちらから紹介する機会があれば、本を読んでくれる余地があるのではないかと思った。
・全体的な感想で、義務感ではなく、調べ物のおもしろさ、物語を読んで想像を広げることの楽しさを伝えていくことが大切だと思った。

委員
　何を読んだら良いかわからないというこどもが多い。
　本を選んであげるために、学校図書館司書の配置が必要ではないかと感じた。家庭での読書の機会も減っている。親世代も本を読まなくなっているので、大人にも読書の大切さを知らせる必要がある。

委員長
　アンケートの集計結果から、大人の本の向き合い方とこどもの読書に対する姿勢が正の関係にあることが丹波市の実態としてわかった。

副委員長
　アンケートの回答率が低い。こども計画は８割を超えている。低かった理由は何か。
　図書室の利用状況に関して、小学生は４割、中学生は９割近くが利用していないことは深刻な課題。半数以上が公共図書館を利用しておらず、あまり身近な施設になっていない。どのようにアプローチができるのかが問題。一方で、図書館以外の場所で本を読む環境がある可能性もあるので、現状把握したい。

係長
　学校教育課が学校を絞ってアンケート回答について呼びかけをしたと聞いている。

副委員長
　今回、市内全ての学校にアンケートをとったかどうかはわからないということか。

係長
　全ての児童・学生にアンケートの配信はされていたが、回答率が非常に低く、学校教育課から学校単位で回答するよう調整のうえ学校長に依頼をされたと聞いている。

委員
　この調査は、依頼文書が来ていたのか。

係長
　学校教育課長から校長会で依頼をしたと聞いている。

委員
　直接生徒のタブレットに配信されていたということか。実施していることを聞いていないので、本校の生徒は回答していないと思う。

副委員長
　調査期間中、夏休みにタブレット機器を更新していたと聞いたが、関係あるのか。

係長
　7月から調査を開始したが、夏休み中は、タブレット機器の更新のため家に持って帰ることができず、回答数が非常に低かった。そのため、調査期間を9月末まで延ばして実施した。

委員
　小学生は、図書室を利用しないこどもは4割程度。外で遊びたいこどもが多いと思うが、昼休みに図書委員が放送で、図書館を開放していると呼びかけているので、もっと利用はあると思う。
　図書室にあれば良いものとして、くつろげるスペースが出ている。こどもたちの思いを実現する図書室として、今年度6校が選ばれ、予算を頂いている。こどもから出た意見の中から、市教育委員会に欲しいものを要望しているが、買えるものと買えないものの縛りが厳しい。今後も、学校を指定して予算措置が続いていくので、もっとスムーズに予算を使うことができれば、こどもたちが図書館を楽しめるようになるのではないかと思う。

副委員長
　学校教育課に状況を伺いたい。今回の計画とも関わってくるので、詳しい取組を知りたい。

係長
　一部の学校のプロジェクトチームには、公共図書館の司書が参加している。どの学校でも生徒児童にアンケートをとるところから始まり、こどもたち自身が理想とする図書室についてプレゼンを行ったり、ワークショップで実現方法について意見を出し合って進められていた。

委員
　希望としてあげた物が実際に購入できたのかどうかはわからない。くつろぐための物としてソファが欲しいという意見は出ていた。

委員
　先月、北小学校の校長先生に会った時は、コンピュータ室と図書室を合わせると聞いていて、どちらの部屋を自由にできるスペースにするのか迷われている段階だった。

委員
　ボランティアで学校に行ったが、今はまだ本の整理やデータ入力をしている状態。

副委員長
　とある学校では、図書室にエアコンがない。環境が理由で利用できないということもあると思う。ハード上の環境を整えることも、アンケートを踏まえて大切だと思った。

委員長
　丹波市の財政措置として、図書室の整備事業があるということか。

副委員長
　指定された6校が、こどもたちの意見を踏まえて取り組む、図書館整備のために1校あたり300万円を単年度で使える事業である。今年が1年目で、今後、順次、学校を広げてやっていく。

委員長
　文部科学省の地方交付税交付金の補助に基づいてやっていることなのか。

係長
　ふるさと寄付金を財源としている。

委員長
　アンケート問8「本を読まないのはなぜですか？」で、小中学生とも「読みたい本がない」と答えている。それに対して、問13「学校の図書室にしてほしいことはなんですか？」で、「いろいろな本をそろえること」と回答しているので、こどものニーズに合った本が学校図書館に十分にないということが推測される。常にこどもに対応できる司書がいない現状が大きいのではないか。

委員
　回答率が低い。先生は児童へ回答したかどうか確認するだけで、回答率が全然違う。こどもたちの意見を聞きたいという図書館側の思いが、学校教育課に伝わっているのかが課題。

委員
　居場所を求めるこどもが多い。図書館へ行く時間がないというこどももいる。

委員
　週に1回、北小学校へ行っている。教室に学校文庫があり、低学年についてはたくさんのこどもたちが見ている。図書館へ行かなくても、本をすぐ手に取れるところにあるのは大切。こどもが「本が嫌い」ということはないと思う。

委員長
　学級文庫の貸出は、全校にしているのか、依頼があった学校だけか。

係長
　団体貸出の依頼があった学校だけである。

委員長
　学校によって幅があるようだが、ぜひ図書館からも働きかけをしてほしい。

委員
　休み時間より業間時間。色々なジャンルの本を用意してくださっているので、こどもたちは業間時間に喜んで見ている。

委員
　ほとんどの中学校に学級文庫がある。図書委員会があるごとに 10 冊選んで用意している。教室でおすすめの本を紹介しつつ、図書室の中で新着本などを平置きすることもある。しかし、休み時間に図書室へ行く時間がない。市島中学校の図書館は、各教室から特に行きにくい場所にある。

委員
　アフタースクールはカリキュラムを組むのが大変。空き時間があるので本を置いているが、本が限られており、選択肢が少ない。支援員は何をすべきか悩んでいる。アフタースクールに本を用意してほしい。

係長
　団体貸出を利用しているアフタースクールもあるので、各アフタースクールにも案内したい。

委員長
　学級文庫が充実すれば、アンケートの結果も変わると思う。

（2）9 月 20 日開催：市民ワークショップで出された意見について　資料 3

説明：係長

委員
　出た意見の中に図書館が出来そうなことは何かあったか。

係長
　図書館のキャラクターは、公募のもと作りたい。

委員
　イベントをしたいという意見が多くあるが、実際にする場合、図書館がすべて段取りするのは大変。図書館ではなく、市民主催でやってもらうなど検討いただきたい。

委員
　もしも市民側から、例えば「絵本に出来てくる料理教室」をやりたい、という意見があれば可能なのか。

係長
　中央館はどうしても機能が限られてしまうが、各分館は住民センターに入っていて、調理室などの設備がある分館では検討できると思う。

副委員長
　実施にあたっては、図書館でこんなことができるという呼びかけや職員と市民側との関係性、市民協働のために出せる予算、コーディネートする人が必要。ニーズは見える化された。

係長
　今までできていなかったことなので、他市の図書館を手本に始めていきたい。

委員長
　やりたいと言っている方は、自分が主体になってやりたい人がほとんど。

係長
　図書館と共催企画ということでやっていきたい。

副委員長
　市民ワークショップで出た意見では、「市民が図書館とできること」として市民ができることをあげていて、ここに出ているだけでも様々ある。

委員
　いきなりは言いにくい。やりたいことがある人が相談できるように期間を決めて窓口を設けてほしい。図書館と関わりがなくても、今から何かを始めたい人はいると思うので、相談しやすいようにしてほしい。

副委員長
　以前から図書館職員から「図書館まつり」のようなことをやりたいという意見が出ていたと聞いている。そういった催しを市民と一緒に開催すればよいのではないか。催しに合わせて募集し、相談しながら進めることができるのではないか。

委員
　分館だったらできることもある。「この図書館だったらこういうことができる」ということを知りたい。

係長
　他市の図書館も参考にしたい。

（3） 丹波市立図書館にかかる予算決算状況について　資料4

説明：係長

委員長
　市全体予算のうち図書館費は 0.37%。自分がいたところは 0.58%。県内、全国の同じ規模の図書館との比較を資料として持っておくと財政との協議もやりやすいと思う。

３．協議事項
（1） 丹波市立図書館基本計画・素案について　資料5

説明：係長

副委員長
　「はじめに」の部分について、「丹波市図書館ビジョン」では、丹波市の教育振興基本計画を上位計画にしたうえで全文が書かれているので、そういったところに触れてほしい。市民協働の図書館運営が１つの柱で、生涯学習の拠点となる図書館を目指すことも方向性としてあると思うので、そういったところを入れていただくのが良い。あらゆる市民に向けたものにしてほしい。

委員
　「はじめに」の部分が長い。

副委員長
　法律や県の計画などをすべて書く必要はない。
丹波市のこども基本法の考え方は、「丹波市こどもの権利に関する条例」で定められている。書くのであれば、そのあたりからで良いのではないか。

委員
　素案について、10 ページ[さまざまな障がいのある方]の自分の利用しやすい形式でという表現はどういった意味なのか。

係長
　録音図書やさわる図書など、その方に合った図書を提供するという意味合いで書いている。

委員長
　情報資源をその方にあった形に媒体を変換して届けるということであれば、形・方法という言葉だと、サービスのスタイルにも情報資源の形式にも言及できると思う。

副委員長
　ページ内の文章が詰まって見づらい。グランドビジョンは 1 ページ使って示すと良い。記載内容が、全体的に本が中心になっている。それ以外にも触れるような表現にすべき。60 歳以上では、図書館に行くことが難しい方が増えてくるので、図書館のサービスが届いていることが大切だと思う。

委員
　中学生の部分も、読書に限定してしまっている。

委員
　市民が図書館に持っているイメージがどうであれば、市民が図書館へ来やすくなるのかを考えたとき、「図書館に聞いたらええやん!!」をキーワードにするのが良いと思う。
丹波市の合併時、公民館の役割は衰退してしまった。公民館にあった相談業務や市民活動は、それまで行政が力を入れて取り組んでいたが、今は貸館のみの状況。市民が活動したいと思ったときに、支所に聞けばわかるが、それは部外だからという扱いをされている感覚を持っている。どこに聞けばわかるのか、図書館がその役割を担えれば生涯学習の拠点として市民

活動ができると思う。そういったことを丁寧にレファレンスして次に繋げていく環境が大事ということをグランドビジョンに書くことが大切。
　こどもたちが調べ学習をするときに「こんな本あるよ」と教えてもらえる。そういったイメージのものをグランドビジョンに加えれば良いと思う。

副委員長
　図書館職員がどのような姿をめざしているのかも書いたら良いのでは。市民との関係性など。また、ひと目でわかる、図解・概要版があればわかりやすいのではないか。10 ページ以降、これからどうするかの部分をまとめる。

係長
　他市の図書館を参考にしながら検討したい。

委員
　11 ページ、こどもの興味が向くようなキャラクターとあるが、こどもだけではないと思う。

副委員長
　11 ページ以降、項目を左から運営方針、アクションプラン、目指す姿にすれば良いのでは。

委員長
　14 ページ、学校司書と学校図書館サポーターの配置が同じ並びだと、サポーターが学校司書の代わりになるような印象になる。「学校図書館司書の配置について」と「司書がつくまでの暫定的な措置として図書館サポーターを配置する」のように別の項目で書いていただきたい。また、「文科省の 5 か年計画をもとに地方交付税交付金の算定額を鑑みて配置を進めるように関係課と協議する」のように、もう少し踏み込んだ表現が良い。

副委員長
　学校図書館整備に関して、他の運営方針と比べて無機質な印象。どんな学校図書館を目指しているのかわからないので、具体的に書いてほしい。学校図書館の蔵書整備と電算化という表現は市民にはわかりにくいので、学校図書館と公共図書館の蔵書システムの連携という表現はどうか。

委員長
　蔵書をデータ上で管理できることはもちろん大事だが、本の搬送システムも大事。これは

学校教育課の仕事なので、計画に書きにくい部分だと思う。そのため、この計画に学校教育課がどれくらい関わっているかが課題であり、こどもの読書活動の環境づくりという点で、その辺りは大切な点である。

係長
　素案の部分は、学校教育課にも承認いただいて整理している。今回いただいた意見をもう一度フィードバックして、表現を協議したい。

副委員長
　第３次こども計画を見ていると、関係部署がもう少し多い印象。実施にあたり、他部署との連絡や協議はどのように行うのか、書いていただきたい。どこの部署が関わるのか、明確にしたい。

委員
　14 ページにアウトリーチという言葉が出てきている。本を届けるという意味合いでこの言葉をわざわざ使わなくても良いのでは。

副委員長
　アウトリーチという言葉は、自分たちもよく使う。近いところに寄っていくという発想は大切だと思う。

委員
　色々な場所で使われていて、様々な意味があるので混乱するかもしれない。

副委員長
　11 ページの「市民の困りごとや課題を相談しやすい、レファレンスサービスの推進」の取組として「図書館の有効性を伝えてくれる応援団的な市民とつながる」というところは、市民協働の図書館運営の観点ではないのかと思う。また、その下の「図書館を実際に使っている市民の声を発信する」というところは、「図書館の取組が伝わる、市民に合わせた情報発信に推進」の観点になると思う。
　12 ページに書かれている「こども司書養成講座」などの対象年齢の拡大については、具体的にどこまでするのか。

係長
　中学生・高校生まで広げる。

副委員長
　大人向けにも図書館の使い方講座やレファレンス体験会をしてほしいという声がある。仕事や健康情報に役立つという打ち出し方に変えることで、「市民の困りごとや課題を相談しやすい、レファレンスサービスの推進」に関わってくる。

委員長
　有償オンラインデータベースを何か利用しているのか。

係長
　今のところはない。

委員長
　農文協のルーラル電子図書館は喜ばれることが多い。年間 10 万円程度なので、検討いただきたい。

副委員長
　電子図書館の使い方についてまだまだ課題があると思う。福知山市のように丁寧に電子図書館の使い方を学ぶ機会を設ける。使い方のサポートもあっての利用率だと思う。

（2） 丹波市図書館基本計画・今後の進め方について　資料 6

説明：係長

係長
　今日いただいたご意見を素案に落とし込み、委員長、副委員長との協議のうえ確定させていただくということでよろしいか。

全員
　了解した。

副委員長
　18 ページの評価指標は、まだ数字が入っていない状況だが、これでよいのか。

係長
　今までは有効登録者率のみを指標としていたが、利用者数の方が大切なのではという意見があった。これまでは来館者数を計測していなかったので、今年度は推定値で、基準を設

定しづらい。これから取組をしていく中で、利用者数が上がると思われるが、目標を決めるのは難しい。

副委員長
　人口は減っているので、今より増えている程度の目標で、何倍にするという見通しは難しいと思う。

委員長
　例えば、分館単位で対象人口がわかるのであれば、対象人口のうち、どのくらいの方が利用したのかという目標の立て方でも良いのでは。

副委員長
　仕事量が増えるので、図書館の負担が増える。できることは外部に委託し、市民と協力する。市民から意見を聞く機会をもつことも、評価ポイントとしてあげられるのでは。
市民の評価により課題を把握することも評価ポイントに入れて、分館も含めて、真庭市のそだて会議的なものができたら良い。この繰り返しによって、市民に図書館の思いが伝わると思う。

委員
　分館をどのように巻き込んでいくか。遠距離だから遠慮してできないこともあると思う。

委員
　イベントは中央館が中心なのか。

係長
　イベントはどうしても中央館が中心になる。
　講座を開催するときは、住民センターの方が部屋があるのでやりやすい場合もある。

副委員長
　各部署でイベントはたくさんやっている。講座に本を展示するなど連携し、これから色々な部署と繋がっていかなければいけない。

係長
　市役所の各部署に、図書館で啓発展示実施について呼びかけをするなどして連携している。中央図書館の視聴覚室やおはなしの部屋の活用についても声かけをしている。

副委員長
　市民活動支援センターでも、「たんばまなびのマルシェ」の開催時に図書館と連携して、本の展示をしている。本があると眺める人が多いので、イベント自体にも興味を持ってもらうきっかけになる。そういった連携ができると思う。

係長
　どの行政計画にも、啓発という言葉が出てくる。お互いの実績にもなるので、図書館でやっている展示を外でもやっていきたい。

委員
　来館者数を統計としてとるようになったきっかけが大切。本を読む人だけが来る図書館ではないと打ち出すのであれば、来館者数は一つの指針だと思う。目標の数値を定めるのでなく、今後はきちんと来館者数を計測するということ自体が、基本計画の大事なところだと思う。

委員長
　今後、評価の方法を検討するために、準備を進めていくという表現が良い。

委員
　今の段階で、来館者はどのようにカウントしているのか。

係長
　職員が手動カウンターを使い計測している。

委員
　出入口のセンサー等で対応してほしい。

委員
　長期的にみて、手動は厳しい。

係長
　目標値を定めるのではなく、今度のために来館者数を計測するということで計画に反映したいと思う。市民協働で実施した事業については、参加者数ではなく事業回数のみを指標としてよろしいか。

副委員長

市民に限るのではなく、他部署や関係団体と協働で何かをしたという数え方ではどうか。

係長

協働で開催した事業ということで了解した。

以上